

『史記』と古代帝王

高橋 庸一郎

序

中国の正史は司馬遷の『史記』に始まる。勿論『史記』以前に史書がなかった訳ではない。例えば『春秋』、『春秋左氏伝』、『国語』なども史書の類ではあるし、『尚書』や三礼も歴史に関する重要な記述が含まれている。また『戦国策』も些か時代は降るのであろうが歴史の書であることには間違いない。またその他、『論語』、『孟子』等をはじめとする諸子百家の書にも多くの歴史が語られている。しかしこれ等の書が『史記』と異なる点はそれらの歴史的記述は極めて断片的であり、地域的に限定され、また時代的にも極度に限定された歴史が記述されているに過ぎないということである。これに対し『史記』は完全な通史という形態を総体として具えている。断片的歴史記述の段階から脱して、通史的歴史観の段階に到るということは、実はその民族にとって極めて重大な意味を持っている。即ちその歴史の編者が属する民族国家が、全体として共同の歴史認

識を必要とするようになったということであり、また全体として共同の、自己民族の拠って来る所の基盤的な歴史認識を必要とするようになったということである。それはつまり民族国家としての自省的自己認識の始まりであり、自己民族国家内に於ける普遍的な人間観の確立を意味するからである。こうした情況が開かれて来る条件は、認識可能範囲内の民族の全体的な政治的統一と、その一定程度の政治的安定、及びその安定期間の一定程度の長期化である。中国中原を歴史上最初に統一したのは秦始皇であった。しかしその統一はまだまだ不安定なものであったし、その統治の期間もたかだか三十年強という短かい期間にすぎなかった。よって秦代は未だ通史的歴史観が確立するまでに至らなかったのである。その点から言えば前漢は二百数十年続き、司馬遷が生れた時にはすでに漢は政權を安定させてから半世紀以上経ていたのである。通史的歴史観確立の機は熟していたはずである。

司馬遷は『史記』を「五帝本紀」から書き始めている。史家が通史を書き始めるに当り、何から書き出すかは非常に重要なことであ

る。神から書き始めるか、人間から書き始めるか、或いは人間以外の獣から書きはじめるか、神でも絶対の神か、或いは多神の中の一神か、人間の場合なら権力を握った統治者か、或いは無冠の普通人か、獣の場合でも、人間の力を超えた神獣か、或いは半神半獣、半獣半人かなど、それぞれの史家の史観が、この書き出しに象徴される。そしてそれはまた単にその史家個人の史観によるものではなく、その史家が生きた時代の、即ちはじめに通史的歴史観が要求されるようになったその民族的段階の、一定の共通歴史認識に依るのである。司馬遷が生きた時代、即ち漢武帝の時代に、歴史上確かに実在したと確信される王朝の始まりは、『史記』於ける殷王の系譜と骨文卜辞に記載されているそれとか殆ど一致している所から見ても、おそらく当時もやはり殷からであろう。しかしかと言って「殷本紀」に書かれた事が凡て事実という訳では勿論ない。太史公は、「余れ頌を以て契え事を次し、成湯自り以來は書詩に采る」と述べているが、「殷本紀」に書かれている事柄は、『詩経・商頌』や、『尚書・商書』にある事ばかりではない。尤も当時太史公が閲した『詩』や『書』が、今我々が目に見ることの出来る『毛詩』や、特に『尚書』と全く同じものであったとは必ずしも言えないであろう。いずれにしても「殷本紀」の前半部分を含めた三本紀の導入部分は「維れ三代は尚し、年紀考う可からず」と太史公も言うように、歴史としては未だ判然としない部分である。まして司馬遷が『史記』の冒頭に配した「五帝本紀」は、おそらく司馬遷にとって最も書き辛い、しかもどうしても書かねばならないものであったの

だろう。それが「五帝本紀」の「太史公曰」を他のものよりも数倍多くの字数を費して説明に務めなければならなかった理由でもあるう。

「五帝本紀」に描かれた五帝、即ち、黄帝、顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜は、それらの源初的発生の姿ではない。『左伝』や『国語』、『山海経』などに垣間見える彼等の姿の方が、更にそのものと姿に近いことは当然である。しかしここでは敢えてあくまで『史記・五帝本紀』を本論展開の基礎に据えた。それは前に既に述べた如く、『史記』以前の、様々なあり方に見える五帝は、漢民族総体の共通意識としてはこの「五帝本紀」に収斂されているものと思われるからである。そしてその五帝一人一人を分析することによってはじめて、漢民族自身の、己との係わりに於ける内的な古代意識を探ることが出来るのではないかと考えるからである。

三帝と神格

五帝の最初は黄帝である。『史記』は、そして『五帝本紀』は次のように始まる。

「黄帝は、少典の子、姓は公孫、名は軒轅なり、生れて神靈、弱にして能く言い、幼にして徇齊、長じて敦敏、成して聰明なり。

軒轅の時、神農氏の世衰う。諸候相い侵伐し、百姓を暴虐するも、神農氏征す能はず。是に於て軒轅乃ち干戈を用いることを習ひ、以て不享を征し、諸候咸く来りて賓従す。而るに蚩尤最も

暴を爲し、伐つ能はず。炎帝諸候を侵陵せんと欲し、諸候咸く軒轅に歸す。軒轅乃ち徳を修め兵を振い、五氣を治め、五種を執え、萬民を撫し、四方を度り、熊、羆、貔、貅、虎を教して、以って炎帝と阪泉の野に戦う。三戦して然る後其の志を得。蚩尤亂を作し、帝命を用いず。是に於て黄帝乃ち師を諸候に徴し、蚩尤と涿鹿の野に戦い、遂に蚩尤を禽殺す。而して諸候咸く軒轅を尊び天子と爲して、神農氏に代り、是れ黄帝爲り。」

この記述は黄帝から始まっている。しかしその黄帝は少典の子であるという。その世は神農氏がおさめていたという。しかし少典や神農氏というのがどういうものか全く触れるところがない。更にここで前後の脈絡なく登場するのが悪者の炎帝と蚩尤である。これについても司馬遷は全く解説らしき事を述べていない。『史記』以前の書にはこれ等に関する記述が存在する。例えば『国語』には、「少典、有蟠氏の女を娶り、黄帝、炎帝を生む」とあり、太史公自身、「秦本紀」の中で、「顓頊氏の裔孫を女脩と曰い、玄鳥の卵を呑みて大業を生み、大業は少典氏を娶りて柏翳を生む」としている。これによって索隱は、「明かに少典は是れ國號なり、人名に非ざるなり」としているほどである。蚩尤については『管子』に「蚩尤廬山の金を受けて五兵を作る」とあり、また『山海経』には、「黄帝應龍に蚩尤を攻ましむ。蚩尤風伯、雨師を請いて以って従わしめ、風雨を大いにす。黄帝乃ち天女を下して曰く、魃、以って雨を止む。雨止りて、遂に蚩尤を殺す」とある。また『韓非子・十過』にも、「昔し黄帝泰山の上に於いて鬼神と合するに、象車にして六の蛟龍なるに

駕り、畢方鑄を並べ、蚩尤は前に居り、風伯は進みて掃き、雨師は道に洒ぎ、虎狼は前に在り、鬼神は後に在り、騰蛇は地に伏し、鳳皇は上を覆い、大いに鬼神と合し、清角を作り爲すなり」と見える。『韓非子・六反』は神農についても、「凡そ人の生きるや、財用うるに足りれば則ち力を用うるに墮し、上懦なれば、則ち非を爲すに肆いままなり。財用うるに足りて、而かも力めて作する者は、神農なり。上治むこと懦にして而かも脩を行う者は、曾、史なり。夫れ民の神農、曾、史に及ばざるは亦た明かなり」とある。こうした記述を司馬遷は読んでいるはずである。「太史公自序」には、「昔し西伯は羨里に拘はれて周易を演べ、孔子は陳・蔡に扈して春秋を作り、屈原は放逐されて、離騷を著し、左丘は失明して厥の國語有り、孫子は脚を躓されて、兵法を論じ、不韋は蜀に遷されて、世に呂覽を傳え、韓非は秦に囚われて、説難、孤憤をつくる」とあるからである。しかし司馬遷は、『国語』や『管子』、『山海経』などの怪なる記述は取っていない。怪なる記述としては『史記』以後の諸家の書には、更に多くの記述を見ることが出来る。例えば神農氏について皇甫謐は『帝王世紀』の中で、「神農氏は姜姓なり、母は任姒と曰い、有蟠氏の女、登りて少典の妃と爲り、華陽に遊び、神に龍首有り、感じて炎帝を生む。人身にして牛首、姜水に長ず。聖徳有りて、火徳を以って王たり、故に炎帝と號す」とあるし、また蚩尤について「正義」には、『龍魚河圖』云、「黄帝攝政するに蚩尤に兄弟八十一人有り、並に獸身にして人語し、銅頭にして鐵額、沙石子を食い、兵仗刀戟大弩を造立し、威天下に振い、誅殺すること無

道にして慈仁ならず」とある。こうした記述は勿論ずっと後代になつてからのものであるが、そのもとなつたものがやはり已に当時あつたにちがいない。それは伝聞によるものかもしれないし、或いは伝説伝承の類によつたものかもしれない。あるいは何等かの文献の類があつたのかもしれない。それらの中には恐らく司馬遷の生きた時代にも既に存在していたものもあつたであろう。しかしやはり司馬遷はそうした怪なるものは取っていない。怪なるものは極力除こうとする姿勢が『史記』には見える。ここに司馬遷の史観の基本の一つを見ることが出来る。

次にいよいよ五帝の第一、黄帝について『史記』がいかに記しているかを見よう。

黄帝の性格は、「生にして神靈、弱にして能く言い、幼にして御齊、長じて敏、成にして聰明」であつたと言う。黄帝が挑まなければならなかつた大きな戦いは、「炎帝と阪泉之野に戦い、三戦して、然る後に其の志を得た」とことと、「蚩尤と涿鹿之野に戦い、遂に禽にして蚩尤を殺す」ことであつたが、これらは軒轅が「徳を修め、兵を振い、五氣を治め、五種を執し、萬民を撫し、四方を度り、熊、羆、貔、貅、虎を教し」たからであつたという。また黄帝は、「東は海に至り、丸山に登り、岱宗に及び、西は空桐に至り、雞頭に登り、南は江に至り、熊、湘に登り、北は鞏粥を逐い、釜山に符し、涿鹿の阿に邑つくる」という。また黄帝が民の爲に行つたことは、「風后、力牧、常先、大鴻を擧げて、以て民を治めたことと、「天地の紀、幽明の占、死生の説、存亡の難に順いて、

時に百穀草木を播し鳥獸蟲蛾を淳化し、日月星辰水波土石金玉を旁羅し心力耳目を勞動し、水火材物を節用し」たことであつた。

以上の記述には黄帝がとりたてて神格を有していると判断される点はない。例えば生れながらにして神靈であるとか、よくものを言うとか、或いは幼少にして聰明であるというようなことは、後代の偉人物評伝などでは極くありふれた表現であり、格別に神格を強調したものではない。また様々な猛獸を調教して戦いを教えたというのは人間業ではないようにおもわれるが「正義」に言うように、「案ずるに、言は士卒をして戦いを習わしめ、猛獸の名を以て之に名づけ、用て敵を威するなり」と考えれば、これとてもそう超人間的な行爲と考える必要はない。そして何よりも、「萬國和し、鬼神山川封禪與に多きを爲す」というのは、黄帝は祭祀の対象ではなく、黄帝自身が祭祀を司る司祭者であるということ述べたものであり、この点からも、司馬遷は少なくとも黄帝に対して何等の神格を与えていないということが出来る。

次に司馬遷は黄帝の孫高陽顓頊について述べている。即ち顓頊の性格は「靜淵にして以て謀有り、疎通にして事を知る」とある。しかしこれは表現は少し異るけれど内容的には黄帝と殆ど同じことを述べているにすぎない。また顓頊の事蹟としては、「材を養い以て地に任じ、時に載して以て天を象し、鬼神に依つて以て義を制し、氣を治めて以て教化し、誠を繋して以て祭祀す」とする。これも内容的には結局黄帝の場合とほぼ同じと言える。ここでも顓頊は祭祀の対象者ではない。

次に司馬遷が記しているのは、黄帝の曾孫である帝嚳高辛である。その性格は、「高辛生れながらにして神靈、自から其の名を言う。善く利物を施して、其の身に於てせず。聰にして遠きを知り、明にして以て微を察す。天の義に順じて、民の急を知る。仁にして威あり、恵にして信あり、身を修めて天下服す」とある。これも内容としては顓頊と殆ど変らない。また帝嚳の事蹟として司馬遷は、「地の財を取りてこれを節用し、萬民を撫教して之を利誨し、日月を曆して之を迎送し、鬼神を明かにして之に敬い事う」と述べているが、これもほぼ顓頊と同じである。

以上黄帝、顓頊、帝嚳についての司馬遷の記述はその一人々々がそれぞれに何等かの特徴を持っている訳ではなく、三者とも略同質の者であるということがわかる。即ち三者とも幼くて聰明、身を修めて民を育み、日月を観るに長じて、四時に従って民をいつくしみ、鬼神をよく祭り、徳を積んで万民皆服したということである。これはつまりこの三者は実は同一の者であったということを表わしているよう。同一格の者を三格に分割してそれを一つの系譜の中に組込んだものであるということが解る。『易繫辭下』に「神農氏没し、黄帝堯舜氏作る」或いは「黄帝克舜垂表而天下治」などとあり、顓頊や帝嚳の事にふれないのはそうした事情のあらわれであるともとれよう。神話加上説によれば、堯舜の上に後の時代にこの三者が一人からひきのばされてつけ加えられたということになる。勿論それをつけ加えたのは司馬遷ではない。司馬遷以前に已にこの三帝は存在していたからである。前に掲げた『周易繫辭伝』の記述などは

その一例である。『左伝』には僖公二十五年に、「卜偃を使て之を卜わしめ、曰く、吉なり、黄帝の阪泉に戦うの兆に遇うなり」とあり、これは『史記』の、「以て炎帝と阪泉の野に戦う」の部分に一致する。杜預はこれに、「黄帝神農の後姜氏と阪泉の野に戦い之に勝つ」と注するがこれは誤りであろう。『左伝』にはまた昭公四年に、「昔し、黄帝氏雲を以て紀とす、故に雲師と爲りて雲名す。」とあり、これは『史記』の、「官名皆雲を以て命じ、雲師と爲す」と一致する。また『左伝』文公十八年には魯の宣公に対して、季文中が大史克に答えさせた中に、

「昔高陽氏に才子八人、蒼舒、隤散、檮戡、大臨、危降、庭堅、仲容、叔達有り。齊聖廣淵にして、明允篤誠、天下の民之を八愷と謂う。高辛氏に才子八人、伯奮、仲堪、叔獻、季仲、伯虎、仲熊、叔豹、季狸有り、忠肅恭懿にして、宣慈惠和、天下の民之を八元と謂う。此の十六族や、世々其の美を濟し、其の名を隕さず、以て堯に至る。堯舉る能はず。舜堯に臣として、八愷を擧げて后土を主りて、以て百事を揆らむ。時に序せざる莫く、地平かに天成ぐ、八元を擧げて五教を四方に布かむ。父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝にして、内平かに外成ぐ。昔帝鴻氏に不才子有り、義を掩い賊を隠くし、好みて凶徳を行ひ、醜類惡物、頑嚚不友、是れ與に比周す、天下の民之を渾敦と謂う。少皞氏に不才子有り、信を毀り忠を廢して、惡言を崇飾し、靖なれば善し庸れば回う。讒を服ひ慝を蒐めて、以て盛徳を誣ゆ。天下の民之を窮奇と謂う。顓頊氏に不才子有り、教訓す可らず、

話を知らず、之に告れば則ち頌、之を舍れば則ち譴、明德を傲
 很して以って天常を亂す。天下の民之を構杙と謂う。此の三族
 や、世々其の凶を濟し、其の惡名を増して、以って堯に至る。堯
 去る能はず。縉雲氏に不才子有り、飲食を貪り、貨賄を冒り、侵
 欲崇侈して、盈馱す可らず。聚斂して實を積み、紀極を知らず、
 孤寡に分たず、窮匱を恤えず。天下の民以って三凶に比し、之を
 饕餮と謂う。舜、堯に臣として、四門に賓し、四凶の族を流し、
 渾敦、窮奇、檮杙、饕餮、諸を四裔に投じて以って螭魅に禦ぐ」
 とある。これは、『史記』の

「昔し高陽氏に才子八人有り、世其の利を得て、之を八愷と謂
 う。高辛氏に才子八人有り、世に之を八元と謂う。此の十六族
 は、世々其の美を濟し、其の名を隕さず。堯に至って、堯未だ能
 く擧げず。舜八愷を擧げ、后土を主さどら使め、以って百事を揆
 りて、時に序せざる莫し。八元を擧げ、五教を四方に布せ使め
 ば、父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝にして、内平らか
 にして外成る。昔し帝鴻氏に不才子有り、義を掩い賊を隠し、好
 みて凶惡を行い、天下之を渾沌と謂う。少皞氏に不才子有り、信
 を毀り忠を惡み、惡言を崇飾す、天下之を窮奇と謂う。顓頊氏に
 不才子有り、教訓す可らず、話を知らず、天下之を構杙と謂う。
 此の三族、世これを憂う。堯に至りて、堯未だ去る能はず。縉雲
 氏に不才子有り、飲食を貪り、貨賄に冒す。天下之を饕餮と謂う。
 天下之を惡み、之を三凶に比す。舜は四門に賓し、乃ち四凶族を
 流して、四裔に遷し、以って螭魅を御せしむ。是に於て四門辟

き、凶人毋きを言うなり」

とあるのと用語、或いは詳細な点については少し異なる所もある
 がほぼ一致している。ただ『春秋』の方がその内容的にはずっとく
 わしいのであるが、両方に共通するのは、この先帝達を、決して超
 人格の者としては扱っていないということである。『左伝』の記述
 は、太史の克の言であり有史以前の歴史に対する太史のこうした態
 度はその後連綿として司馬遷にまで受け継がれて来たのであろう。

即ちその史観の中心は、史官が叙すべき歴史は、あくまで人の歴史
 であって、人以上の者、或いは人らしき者でありながら且つ人では
 ない者の歴史ではないということである。つまり人格と神格を厳し
 く峻別しているのである。こうした考え方は、『左伝』とはほぼ同時
 代に編纂されたと思われる『国語』の中の記述にも見ることが出来
 る。『国語・楚語下』には、昭王の問に対する觀射父の答えとして、
 「古は民神雜らず。……是に於て、天地神民類物の官有り、是れを
 五官と謂い、各々其の序を司り、相い亂れざるなり、民是を以って
 能く忠信有り、神是を以って能く明德有り、民神業を異にし、敬し
 て瀆さず。」とある。この觀射父について韋昭の注には「楚の大夫」
 とするのみで詳しくは知られないがその言葉から、おそらく祭祀全
 般に精通した史官に類する官職にある者であろう。また同じく『国
 語・魯語上』には、「昔し烈山氏の天下を有つや、其の子を柱と曰
 う、能く百穀百蔬を殖す、夏の興るや、周の棄これを繼ぐ、故に祀
 りて以って稷と爲す、共工氏の九有に伯たるや、其の子を后土と曰
 う、能く九土を平ぐ、故に祀りて以って社と爲す」とある。これも

稷や、杜のように人格を超えて祭祀の対象となったのはその働きの功によって後人が祀るようになった為であって、それ等がもとから神格のものであったという訳ではない、という可成り冷静な分析が読みとれる。ということは即ち『左伝』や『国語』の記述内容が示す紀元前五・六世紀、所謂春秋時代には、或いはそれ等の書が編纂されたと思われる戦国中期から後期にかけての時代には、已に少なくとも魯・楚などの文化発展程度の高い国の、政治の中枢に抱えられた高級知識人達は、人と神とをはっきりと区別し、歴史を含む国事全般について、神と人との役割りの領域範囲を分割するという考え方が確立していたと考えてよいであろう。尤も『左伝・昭公二十九年』の条に魏献子と蔡墨の問答があり、その中で蔡墨が、「少皞氏に四叔有り、重と曰い、該と曰い、脩と曰い、熙と曰い、實に金木及び水を能くす、重をして句芒と爲し、該をして蓐收と爲し、脩と熙とを玄冥と爲らしむ、世々職を失はず、遂に窮桑を濟りき、此れ其の三祀なり、顓頊氏に子有り、犁と曰い、祝融と爲る、共工氏に子有り、句龍と曰い、后土と爲る。此れ其の二祀なり、后土を社と爲す。稷は田正なり、有烈山氏の子を柱と曰い、稷と爲る、夏より以上これを祀りき、周棄も亦た稷と爲る、商より以來これを祀りき」と述べた件があり、この蔡墨は、次の昭公三十二年に登場する史墨のことであるとされ、やはり史官である。ここで史墨の言っている内容はある種の神話的背景を想像させる。しかしここでの史墨の主眼は、祭祀の由来であって歴史を述べている訳ではない。特に『左伝』では顓頊について触れる所が多いのはそれらは殆ど星の名

として天宿の位置関係から来るある種の占卜について述べたもので、それらの歴史を記したものではありません。こうして見て来ると、やはり紀元前五・六世紀までには、後の司馬遷に確立されている所の怪なるものを退けるという歴史記述態度がすでに不安定ながらも成立していたと考えられよう。

こうした有史以前の歴史について、春秋期に早くも已に神格と人格の分割が志向されていた理由は種々考えられようが、その主要なものやはり儒家思想の隆盛であろう。極めてありふれた解説になるが『論語・述而』の、「子怪力亂神を語らず」、「雍也」の、「樊遲、知を問う、子曰く民の義を務め、鬼神を敬してこれを遠ざく、知と謂う可し」、また『先進』の、「季路鬼神に事えんことを問う、子曰く、未だ能く人に事えず、焉んぞ能く鬼に事えん」を掲げなければなるまい。鬼神とよりも、徹底して人間相互の関係を追求した仲尼の考えは、当時、仲尼だけが持ちえた突出した思考では決まらなかったであろう。やがて戦国期という極度な乱世を迎えるべき、その前の春秋期には、已に覇者が台頭し、戦国の大きなうねりが始っていた事を考えると、仲尼の考えは戦乱の世に打って出るには必須のものであったにちがいない。ただそうした考えの実戦的応用についてはそれぞれの国の事情により大きく異ったであろうが、また民衆段階にまで拡大して考えてみてもそれはやはり時代的要請の中で育くまれた思考の結晶であったにちがいない。少なくとも政治を神々に対する祭祀と混同しては来るべき乱世を迎え打つことは出来ないと考えられていたはずだからである。

堯舜と神話

『史記』によれば、放勳帝堯は、帝嚳高辛と陳鋒氏の女との間に生れた子供である。このことは『左伝』、『国語』には明記されていない。『山海經』の郭璞の注に、「嚳は堯の父なり、高辛と號す」とあるのは『史記』に依ったものであろう。堯の性格は、「其の仁天の如く、其の知神の如し、之に就けば日の如く、之を望めば雲の如し、富みて驕らず、貴にして舒せず」であつたという。これも前の三帝の場合とそんなに変わる所はない。そして事績としては、「能く馴徳を明かにし、以って九族を親しみ、九族既に睦じければ、百姓を便きまえ章かにす。百姓昭明にして、萬國合和す」とある。『史記』が述べる所の、堯自身の行つたことは以上であつて他は殆ど何もしていない。『左伝・文公十六年』の太子克の言葉にも、「此の十六族や、世々其の美を濟して、其名を隕さず、以って堯に至る。堯擧げる能はず」「此三族（渾敦、窮奇、檮杌）や、世々其の凶を濟し、其の惡名を増し、以って堯に至る。堯去る能はず」とあつて、ここでもあまり有能な統治者ではないような書き方がされている。堯を舜とともに最も慕つてやまなかつたのは孔丘である。『論語・雍也』に、「子貢曰く、如し能く博く民に施して、能く衆を濟わば、何如、仁と謂う可きか、子曰く、何ぞ仁を事とす、必ずや聖か、堯舜も其れ猶お諸を病めり」といい、また『憲問』にも、「子路君子を問う、子曰く、己を脩めて以って敬す。曰く、斯くの如きのみ

か、曰わく、己を脩めて以って人を安んず、曰く、斯くの如きのみか、曰わく、己れを脩めて以って百姓を安んず、己を脩めて以って百姓を安んずるは、堯舜も其れ猶お諸を病めり」とあつて、孔丘は堯舜を自分を含めた高踏の人でさえ寄りつけない程の最高の聖人として崇めているのである。孔丘をそこまで心服させた堯の魅力は、その政權を譲るに自分の子丹朱を退けて、舜を挙げたことである。孔丘の持つ禪讓の思想が、周公旦とこの堯によって歴史的な実現を見ていたからであつた。そして更に堯を継いだ舜の生い立ちを含めた人柄と、その政治的手腕、特に多くの秀れた家臣達を抱えることが出来たということが、堯を實際よりも耀かしたということもあるであらう。そうしてこうしたことが堯と舜とは一人格であつたのではないかと思わせる点である。

こうして見て来るとこの堯にも人格を超えた神格的な側面は全くないように思われる。しかし実はこの『史記』の中で、この堯に関する記述の中に『史記』としては最も早期の（と言うべきか、或いは神話加上説にのつるとすると、最も後期のと言うべきか）神話的記述を見出すことが出来るのである。それは次の部分である。

「乃ち羲、和に命じて、敬しみて昊天に順い、日月星辰を數法し、敬しみて民に時を授けしむ。羲仲に分命して、郁夷の暘谷と曰うに居らしむ。敬しみて日の出るを道びき、東作を便程す。日中、星鳥以って中春を殷し、其の民は折し、鳥獸字微せしむ。義叔に申命して、南交に居り、南爲を便程し、敬しみて致し、日永、星火、以って中夏を正し、其の民因し、鳥獸革を希たらしむ。和仲に申命し

て、西土の昧谷と曰うに居り、敬しみて日の入るを道き、西成を便程し、夜中、星虛、以って中秋を正し、其の民夷易し、鳥獸毛毼せしむ、和叔に命じて、北方の幽都と曰うに居り、伏物を便在し、日短、星昴、以って中冬を正し、其の民煖し、鳥獸毛毼せしむ、歳三百六十六日、閏月を以って四時を正し、信飾百官、衆功皆な興る」

ここに言う義、和、義仲、義叔、和仲、和叔などについては『左伝』や『国語』には全く記されていない。義和は『書経・堯典』には天地四時をつかさどる官職として見えるものである。『山海経・大荒南経』には、「東南海の外、甘水の閭、義和の國有り、女子有りて、名づけて義和と曰う、方に日を甘淵に浴せしむ」とあり、また『淮南子・天文訓』に、「日は暘谷より出でて、咸池に浴し、扶桑に拂う、是を晨明と謂う……連石に至れば是れを下春と謂い、悲泉に至れば、其の女を止め、其の馬を息ませ、是れを縣車と謂う……」とある。恐らくこの二書にとられた記述はもとひとつのものから派生しているにちがいない。『山海経』に付された郭璞の注には、「義和は蓋し天地の始めて生ぜしとき、日月を主りし者なり、故に啓筮に曰く、空桑の蒼蒼たる、八極の既に張るや、乃ち夫の義和有り、是れ日月を主り、出入を職として以って晦明を爲すと、又曰く、彼の上天を瞻るに、一明一晦す、夫の義和の子有り、暘谷より出すと、故に堯此に因りて義和の官を立て、以って四時を主らしむ」とある。この注を少し正確に補うとすれば、堯が義和の官を立てたのではなく、『尚書・堯典』の編纂に携った者か、或いは、それを職能として記憶伝承の役を荷った者が、巷間に伝えられていた

太陽運行神話とでもいうべきものの中から義和の名とその職を選んで、一つの官職として『堯典』にとり入れたということであろう。太陽信仰に基くと思われるこうした太陽神話や、太陽運行神話といったものは、本来日照時間が長くて、日照光の強い南方系の神話であり、『山海経』の中でも『大荒南経』にとられているのもそうした理由が背景があるはずである。しかしまたこの神話の『堯典』や『史記』への非常に整理されたとり入れられ方から見ると、この神話ももとはそう壮大で完成されたものではなかったと思われる。壮大で完成されたものから一部だけ抜きとって来るということとは、抜きとる方の権威を大いに失墜することになるし、また、抜きとって来ることによって、その記述がかえって抜きとられた方のもとの神話との関係が連想されることによって、せっかくの歴史的史実性を事とした記述の本質が失われる危険性があり、司馬遷は、もし彼の時代にまでその神話が伝承されていたとしたら、恐らくそうしたやり方は拒否したにちがいないからである。いづれにせよこの場合の太陽運行神話は、当時から本来已に非常に断片的なものにすぎなかったか、或いは地方の、中央には殆ど知られていなかった神話であったか、どちらかであったにちがいない。

司馬遷の舜についての記述は、いままでの三帝及び堯とは少し異っている。即ち、その人となりの秀れた点を抽象的にあげつらうことをしていない。舜の生い立ちを語る中に具体的に述べているのであり、それが堯によって見出されるキッカケとなっているのである。そして更にその事績も、前の先帝達の場合のように「萬民莫不

服也」と言った結論風の表現は一切使われていない。この『五帝本紀』全体を通じて舜についての記述のし方は、他の四帝の場合と全く異っているということは注意を払うべきであろう。つまり堯はこの舜の敷衍された影であろうかと思われる。堯の業績は舜に負う所が多いようである。心よこしまなる共工を幽陵に流し、その共工を推薦した驩兜を崇山に放ち、乱をしばしば起した三苗を三危に遷し、黄河の治水に失敗した鯀を羽山に放逐して、堯の未完の治政にすべて決着をつけてしめくくったのは舜である。『左伝、文公十八』に、

「舜は堯に臣たり、四門に賓し、四凶の族を流し、渾敦、窮奇、檮杌、饕餮、諸を四裔に投じ、以て魍魎を禦さしむ、是を以て堯崩じ天下一の如く、心を同じくし舜を戴して以て天子と爲す。以て其の十六の相を擧げ、四凶を去るなり。故に虞書舜の功を數えて曰く、愼みて五典を徴し、五典克く従う、教に違ふこと無きなり、曰く、百揆を納れ、百揆時に序あり、事を廢する無きなり、曰く、四門に賓し、四門穆穆たり、凶人無きなり、舜大功二十有りて天子と爲る」とあるのはそのことをよく物語っている。しかし舜記の最も舜記たる所以はやはり、「盲者の子、父は項、母は畱にして、弟は傲なるも、能く和して以て孝たり、烝烝として治め、姦に至らず」の点であり、『史記』には更に物語的に構成された文がとられている。これはおそらく神話というより、一孝子の説話として伝承されたものがその下地となっているのであろう。ということは舜についての記述が何も史実に基づいているということの意味する訳

では決していない。「舜乃ち璿璣玉衡に在りて、以て七政を齊う、遂に上帝に類し、六宗に禋し、山川に望し、羣神に辯し、五瑞を揖め、吉月日を選びて、四嶽諸牧に見えて瑞を班す」などは聖天子の理想の政治の理想のあり方を述べたものであろう。「歳に二月に東に巡狩し、岱宗に至り、柴し、山川に望秩す。遂に東方君長に見え、時月を合せ日を正し、律、度、量、衡を同じにし、五禮、五玉三帛、二生、一死を脩めて摯と爲し、五器の如きは、卒りて乃ち復す、五月に南に巡狩し、八月には西に巡狩し、十一月には北に巡狩して、皆如初」などというのも全くこの理想の業に類するものである。

扱、舜の記述で最も注目すべきは、堯のときから、後には舜に仕えたとされる賢臣達である。即ち、禹は司空として、皋陶は士として、契は司徒として、后稷は農官として、伯夷は秩宗として、夔は典樂として、龍は納言として、倕は共工として、益は虞として事えたと言う。この他に彭祖、四嶽、十二牧などがあつたとされている。このうち禹は夏の祖であり、契は殷の祖であり、子姓后稷は周の祖であり姫姓である。もともと夏、殷、周はそれぞれ敵対関係にあった国でありお互いには憎しみはあればこそ、政治的な主従の関係などはあり得ないはずである。そうしたものをすべて一緒にして舜のもとに仕えさせるという構成は、それこそ非常に政治的な臭いが強いと言える。三代の祖以外の諸臣は、恐らくもともとは地方部族の神々でもあつたにちがいない。それ等も含めて一つに結集させようとした政治的意図が裏には働いていたのであろう。このような話しの構成は、『左伝』や『国語』にはまだない。それは恐らく

『尚書』が編纂される過程で徐々にそうした企図に導かれていったのであろうと思われる。そしてそのことが、これ等の賢臣達に本来そなわっていたはずの神話的性格を根こそぎ削奪されてしまった理由でもあろう。そして更にそのことが民族全体としての通史の確立を要求するに至った覇者達のまたその段階での民族全体の要請でもあったはずである。

(一九九〇年五月九日受理)